

内田魯庵

二葉亭四迷

—遺稿を整理して—



# 二葉亭四迷

—— 遺稿を整理して ——



二葉亭四迷の全集が完結してその追悼会が故人の友人に由て開かれたについて、全集編纂者の一人としてその遺編を整理した我らは今更に感慨の念に堪えない。二葉亭が一生自ら「文人に非ず」と称したについてはその内容の意味は種々あるが、要するに、「文学には常に必ず多少の遊戯分子を伴うゆえに文学ではドウシテも死身になれない」と或る席上で故人自ら明言したのがその有力なる理由の一つであろう。が、文学には果して常に必

ず遊戯的分子を伴うものである。およそ文学に限らず、如何なる職業でも學術でも既に興味を以て従う以上はソコに必ず快樂を伴う。この快樂を目して遊戯的分子というならば、發明家の苦辛にも政治家の經營にもまた必ず若干の遊戯的分子を存するはずで、国事に奔走する憂国の志士の心事も——無論少数の除外はあるが——後世の伝記家が痛烈なる文字を陳ねて形容する如き朝から晩まで真劍勝負のマジメなものではないであろう。あるいはまた真劍勝負であつてもこの真劍勝負が一つの快樂であつて、その中に必ず多少の遊戯的分子を含んでおる

だろう。

が、二葉亭のいうのは恐らくこの意味ではないので、二葉亭は能くよ西欧文人の生涯、殊ことに露国の真率かつ痛烈なる文人生涯に熟していたが、それ以上に東洋の軽浮な、空虚な、ヴオラプチュアスな、廃頹はいたいした文学を能く知りかつその気分にしんせん瀰染していた。一言すれば二葉亭は能く外国思想に熟していたが、同時にやはり幼時から染込んだ東洋思想を全くはいだつ擺脫する事が出来ないで、この相背馳あいはいちした二つの思想の蹉着とうちやくが常に頭脳に絶えなかつたであろう。二葉亭が遊戯分子というは西鶴や其蹟、三馬や京

伝の文学ばかりを指すのではない、支那の屈原や司馬長卿、降つて六朝は本もとより唐宋以下の内容の空虚な、貧弱な、美くしい文字ばかりを聯なべた文学に慊あきたらなかつた。それ故に外国文学に対してもまた、十分渠かれらの文学に従う意味を理解しつつもなお、東洋文芸に対する先入の不満が累をなしてこの同じ見方からして、その晩年にあつてはかつて随喜したツルゲーネフをも詩人の空想と輕侮し、トルストイの如きは老人の寢言だと嘲つていた。独り他人を輕侮し冷笑するのみならず、この東洋文人を一串する通弊に自ずから襪染わくせんしていた自家の文学的態度を



も危ぶみかつ飽足らず思うて而して「文学には必ず遊戯的分子がある、文学ではドウシテモ死身になれない」という。近代思想を十分理解しながら近代人になり切れない二葉亭の葛藤は必ず爰ここにも在ったろう。

二葉亭に限らず、総て我々年輩のものは誰でも児供の時から吹込まれた儒教思想が何時まで経っても頭脳の隅のドコかにこびり着いていて容易に抜け切れないものだ。坪内博士がイブセンにもシヨオにもストリンドベルヒにも如何なるものにも少しも影響されないので益々自家の墨を固うするはやはり同じ性質の思想が累をなすので

ある。最も近代人的態度を持する島村抱月君もまた恐らくこの種の葛藤を属々繰返されるだろう。

この殆んど第二の天性となつた東洋的思想の傾向と近代思想の理解との衝突は啻ただに文学に対してのみならず総ての日常の問題に触れて必ず生ずる。啻に文人——東洋風の——たるを屑くずしとしないのみならず、東洋的の政治家、東洋的の実業家、東洋的の家庭の主人、東洋的の生活者たるを欲しない。一言すれば東洋的の生活の総てに不満であつて、その不満に堪えられない。そんならその不満を破壊する決心を有するかというと、決心を有さ

ないではないが、常にその決心を鈍らす因襲の思想が頭  
脳のドコかで囁やいて制肘する。二葉亭の一生はこの葛  
藤の歴史であつて、独り文人たるを屑しとしなかつたば  
かりでなく、政治的方面にも実業的方面にもちよつと首  
を突込で見て直ぐイヤになつた。この方面では二葉亭の  
手腕がまだ少しも認められないで政治家だとも実業家だ  
とも誰にもいわれなかつたゆえ、「我は政治家に非ず、  
実業家に非ず」と一度も言わなかつたは、二葉亭は日本  
の政治家にも実業家にも慊らなかつたのだ。朝日新聞記  
者として永眠して死後なお朝日新聞社の好意に浴してい

るが、「新聞記者はイヤだ、」といった事は決して一度や二度でなかった。ただ独り職業ばかりではない。その家庭に対してすら不満が少くなかった。（家庭が不和であつたという意味ではない。）更にまた一步を進めていようと、二葉亭は生活の総てに対して不満であつたが、何よりも彼よりもこの不満を如何ともする能わざる自己に對する不満が不満中の最大不満であつたろう。言換えると二葉亭は周囲のもの一切が不満であるよりはこの不満をドウスル事も出来ないのが毎日の堪えざる苦痛であつて、この苦痛を紛らすための方法を求めるに常に焦つて

悶えていた。文学もかつてその排悶手段の一つであったが、文学では終に紛らし切れなくなつたので政治となり外交となつたのである。二葉亭が「文学では死身になれない」というのは、取りも直さず文学のような生なま柔やさしい事ではとても自分の最大苦悶を紛らす事が出来ないという意味にも解釈される。

世の中には行詰つた生活とか生の悶えとか言うヴオヤビュラリーをのみ陳列して生活の苦痛を叫んでるものが多いが、その大多数は自己一身に対しては満足して蝸殻の小天地に安息しておる。懷疑といい疑惑というもその

議論は総てドグマの城壁を固めて而してドグマを以て徹底した思想とし安心し切っておる。二葉亭が苦悶を以て一生を終ったに比較して渠かれらは大いなる幸福者である。

明治の文人中、国木田独歩君の生涯は面白かった。北村透谷君の一生もまた極めて興味がある。が、二葉亭の一生はこれらの二君に比べると更に一層意味のある近代的の悶えと艱なやみの歴史であった。







日本文学電子図書館

---

二葉亭四迷 一遺稿を整理して一

著 者：内田魯庵

制作者：宮澤一郎

底 本：「新編 思い出す人々」  
岩波文庫、岩波書店

1994年2月16日 第1刷発行

---

日本文学電子図書館